慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Edward IIにおけるTragic vision
Sub Title	Tragic vision in Edward II
Author	池上, 忠弘(Ikegami, Tadahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.93(11)- 103(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Edward II における Tragic Vision

池　上　忠　弘

Seneca 的様式を最大限に発揮した Shakespeare の *Richard III* に先立って英国史劇として重要な位置を占める Christopher Marlowe (1564—93) 最後期の作品 *Edward II* (1591 or 92 年創作と推定さる)[1]は，当時の有名な歴史書の一つ Raphael Holinshed の *Chronicles of England, Scotland and Ireland* (1577. 第2版 1587) を主たる素材としてこれをかなり忠実に使用しながらも，彼の劇作にあたっての取扱い方は彼自身の独自な個性的考えに従って大胆でかつ効果的である。この年代記をまず彼の劇作と比較しながら劇の基本的構造を辿ってみれば，彼の創作の意図と方向が自ら明らかになってくるであろう。それについで，主として国王の性格に起因するこの劇の悲劇性を考えてみたい。

この劇の扱っている期間は，1307年の Edward II (1284—1327) の即位から王の死後 1330 年反逆者 Mortimer Junior の処刑にいたる 23 年間の出来事で，ほぼ Edward II の全生涯をおおっているが，これを恰も短時日の連鎖的事件のように劇化し，巧みに必要な箇所だけを選択しながら圧縮している。Marlowe はこの劇作にあたって，まず寵臣 Gaveston と Spencer の急速な抬頭と彼らと王との奇妙な人間関係に強く心をひかれたようである。劇全体の構成としては 2 つの大きな部分から成り立っているが，1307—12 年の間の Gaveston をこの劇前半の action の中心に据える。国王はこの男に操られた人形である。

先代の偉大なる Edward I が亡くなって，フランスから帰国したばかりの Gaveston を再追放（実は 2 度追放されるのだが）からすぐ釈放するきっかけを作ったのは，ほかならぬ，王の愛を取り戻したいばかりに心をくだいた王妃 Isabella である。彼女はかねてより Gaveston をなかに狭んだ王と諸侯の確執の間に入って事を円くおさめようと努力するが，そこで有力な貴族 Mortimer Junior の尽力を求めることになる。歴史的にはこの Mortimer は Gaveston 問題に全然関係がなく，後に 1322 年伯父の起した反乱の時表面に出てくる人物なのだが，おそらく *Mirror for Magistrates* (1578) の 'The Two Mortimers' などから彼の重要性のヒントをえて[2]，ここで早くも Mortimer と王妃のこれからの秘密の関係が暗示され (I. ii.), sub-plot としてのこの先の強い伏線となる。Gaveston の影のようにその次に登場してくる Spencer Junior は二番煎じの感を免がれないが，史実では Spencer も Gavestonも共に Gloucester 伯の令嬢姉妹をそれぞれ自分の妻にしている親密な関

係にある。Spencer の登用（1312）は実は Gaveston の死後10年ほどたってからのことであるから，3幕1場と3幕2場の間にはそれだけの時間的距りがあることになる。しかるに劇では Gaveston と Gloucester 伯の娘との結婚（1307）の折に，Spencer と Baldock を伯の家臣に仕立てて2幕1場に登場させることにより劇の進行を円滑に行くようはかっている。3幕と4幕は前半と後半のいわば継ぎ役で，英仏にまたがる主として戦闘の場面が目まぐるしいほど次から次へと展開される。フランスやスコットランドなど外国に関する事柄はほとんど省略され，重大な内戦も，Holinshed ではごく簡単にすまされている Tynemouth 城の戦（1312. II. iv.）と Boroughbridge の戦（1322. III. iii.）だけに絞られる。さらに劇では愛する Gavestonの復讐を念じて戦った Boroughbridge の戦で王は一時的勝利をうるが，後が続かず，フランスに行っていた妃と脱獄してフランスに渡った Mortimer 連合の侵入軍に追いまわされ，遂におちのびたウエールズの修道院で捕ってしまう。これからが実質的な後半になり，Holinshed よりも一層外見上弱々しい人間につくられた以後の捕われの Edward は専ら悲劇の王と化して，ヤマバとなる国王退位の場面（V. i.）と国王殺害の場面（V. v.）をむかえる。最後のしめくくりは劇を形よくおえねばならぬためか急激かつ圧縮的で，3年間を1場にまとめ，国王殺害首謀者 Mortimer の処刑，王妃のロンドン塔幽閉，子息 Edward III による Edward II の葬儀であわただしく終る仕組みである。

このように劇的構成を辿ってみると，作者 Marlowe の関心は年代記的歴史上の事件の羅列やその意味よりも，むしろ主人公の Edward II をめぐる様々な激しい人間関係の触れ合いとその張りつめた動きに向けられていて，出来事はこれらの登場人物のおかれた色々な situations を提供しているだけにすぎないことがわかるであろう。今迄の劇団とちがって新たに Pembroke 伯劇団の俳優にあわせてこの脚本を書いたためであろうか，従来の Marlowe 劇の主人公らしくない主人公の登場となって，それだけ脇役の活躍を必要としている。これは一人舞台の劇から本格的な劇の方向へむかった印といえるかもしれない。この劇の主題は1594年の初版本の title-page に端的に表示されている。*The troublesome raigne and lamentable death of Edward the second, King of England: with the tragicall fall of proud Mortimer.* さらに第2版の1598年の Quarto 版ではこの後をうけて，*And also the life and death of Peirs Gaueston, the great Earle of Cornewall, and mighty fauorite of King Edward the second* とある。E. M. W. Tillyard によれば[3]，主題は弱い国王の地位と過度の政治的野心に対する罰であるが，Shakespeare に代表される当時の典型的歴史劇にくらべて政治性はうすいようにみえる。ところで，「王者の没落」という伝統的悲劇観があるとはいえ，何故えりにえって英国史上 Richard II, Henry VI と並んで，退位させられ虐殺されたような悪名高い魅力の乏しい国王を題材の主人公に選んだのであろうか。彼らは真のよき老練な相談相手の意見や忠告に耳をかさず，本当の頼りにならない邪な側近を非常に重んじ彼らの愚かな意見に

ひきずられ，そのため自らを滅してしまい王自身の名誉をも傷付け，ひいては国家の安体を脅し王国の威厳を損ねてしまったといわれている。[4] 英国王をドラマの主人公に選ぶとするならば，これまでの Marlowe 劇の主人公にふさわしいもっと評判のよい強くて立派な英国王は他に何人もいた筈である。Marlowe はどうやら人間の精神の強度を思いきり試してみたかったらしい。この創作を思い立った具体的目標は，おそらくは作者自身の性格的傾向から王と Gaveston の同性愛的関係[5]と，そのまともな反動として Mortimer と王妃の不倫な関係が生れた人間関係のあやしいまでの揺れ動きに魅惑されたか，あるいは王の悲劇的最後の悲哀と恐怖[6]（これはアリストテレスの *Poetics* にある有名な文句を思いおこさせる）に注目したかのいずれであろう。この二点は共にこの劇の二つの中心点であり，作者の劇的ねらいもそこにあったといえよう。

この劇の全体的構想は一応当時の歴史・年代記や *Mirror for Magistrates* などに見られる中世以来の道徳的悲劇観（de casibus 主題）の伝統に従っている。はじめ栄華をきわめた位高き王が正常ならざる愛情の故に Mortimer に敗れ，さらにこの Mortimer が野心をいだき臣下として行きすぎた行為の故に Edward III に敗れるという，sin と justice に基づく因果応報的二重の昇り降りの形式をとっているが，前者の方により大きな劇的比重をかけている。権力者が共に最後に破滅するのはいずれも自分自身に重大な誤ちとそれに対して負わねばならない責任があるためで，いわば身からでたサビであり，また共に最後が死で終るのはエリザベス朝の人々の悲劇観の好みによっている。[7] そして中心人物の Edward II を劇の核心に据え，その周囲に敵・味方入り乱れてすべての事件が起って行くよう工夫されているが，劇の進行上国王側と貴族側の葛藤という対立形式であらわされている。Edward の Fortune の転機を伝え劇的 mood を変える，途中の慌しいつなぎの挿話的部分は，王と寵臣の関係及び Mortimer と王妃の関係によって前半と後半を固く結付けている。王の内的反映が，前半では外面的に王だけが「もう一人の自分」(cf. I. i. 143) と思いこんでいた Gaveston の動きを通して，後半では一段と際立ってきた王妃と *The Massacre at Paris* の Guise 公の血統をひく Mortimer の反逆的行動を通して展開され，その上彼ら二人の場面と苦悩の王の場面が巧みに交錯する。Edward にとって，前半は自分の好きなことが何でも思いのままにできて，一応自分の我が通った明るい世界，一転して後半はことごとく自分の思うようにならず，一路下り坂を走り続ける全くとじこめられ押えつけられた哀れな暗い世界である。

劇の冒頭部分では，まるで華麗な Marlowe 的 prologue のように，フランスでの追放がとけて帰国したばかりの Edward の最もお気に入りである Gaveston が，国王との芸術的な享楽生活を夢みて歓喜の歌声をあげる。道徳的な Holinshed は Gaveston を国に害毒を流す利巳的な追従者，偽善家，食客としているが，彼は生れの卑しいフランス（ガスコニー）人の成上り者，才智にたけ野心満々，自尊心が強く，贅沢を愛する。本来ならば王の愛にも価しない人物であるが，王の寵愛を一

身に受けていることをよいことにして，王を自分の意のままに操縦しようとたくらむ Machiavellian で，そのため諸侯にひどく嫌悪される。(Interlude の Vice 的要素がところどころに見受けられるようである。)

So I may have some nook or corner left
To frolic with my dearest Gaveston. (I. iv. 72—3)

Because he loves me more than all the world. (I. iv. 77)

ほとんどの宮廷人に嫌われている Gaveston を愛する理由を上記のように答えた Edward は，いくども繰返して "minion" とか "Gaveston" と甘美に呼びかける。[8] 明らかに王は神の gratia のあらわれである婚姻の秘蹟を破り，その上神の前にも人の前にも許されない異常な愛情にとりつかれている。[9] そのために王に愛情をいだく王妃は全く見捨て去られてしまう。一方，諸侯や司教たちにとっては Gaveston の永久追放はスコットランド遠征中に亡くなった先代の王の遺言でもある。彼らは自らの地位と生れのよさを誇り，王のつまらぬ人間に向けられた過度の寵愛ぶりとその寵臣どもに引きずりまわされている様を，王室ひいては国家の無秩序と混乱の因だとして苦々しく思い，生れの卑しい妙な取巻き連中をさげすみ，折あらばこの邪な者どもを国と国王のために追払おうとねらっている。諸侯がこのような事態を憂えて Gaveston の追放を執拗に迫るのが事のそもそもの起りであり，劇が活動をはじめる動機でもある。

ところが，Holinshed によると Edward は "misguided and incompetent king" として罪の大部分の責任を Gaveston と Spencer に負わせているが，[10] しかし王の道義的責任はまぬがれがたくまた極めて重大であることを当時の観客は充分承知して，後半 Edward の辿らねばならぬ運命のおおよそを前半すでに予期している。王は元来おとなしいおだやかな人であった (I. iv. 387) が，軽薄で我が強く自己満足的で，つまらぬ下等な人物を寵愛し重んじて自分の側に置き，感情に流れ激情に溺れやすい子供っぽい人物である。身体は非常に強健で後半部の迫害に耐えぬいていたほどだが，精神的には外見上弱そうにみえる快楽主義者である。発作的な急激な怒りによって王者の威厳を示そうとし，実力のないくせに幻影の如き国王の特権を私有物のように濫用し誇大視するのだが，その一方では王としての義務や責任を全く無視して寵臣との私生活を享楽しようと熱望する。これこそが国王の生きる全世界で，その他のものは彼の眼中にない。哀れな王の，人間として心からいこえる唯一つの世界だったのかもしれない。

Gaveston の帰国にそわそわしてフランス軍の Normandy 侵入を意に介せず "A trifle!" (II. ii. 10) の一言でかたづけたり，あるいは Gaveston 追放に一役買った自分の気にいらない Coventry 司教の土地財産をすべてとりあげて，その場でこれをそっくり寵臣 Gaveston に与えて甘心を買う (I. i. 175—207) ように，国を私有物とまで考えてしまう (I. i. 161—70)。彼の情熱 (passion) はすべて一人の同性

に向けられ，国や王位また王妃をも全くかえりみない。この事実上の国王失格者は王権を振りまわしてみても，もともと進んで国を治める気持もなく所詮実力がともなわないので命令は全く無視され，いつも敵側から非難され軽蔑されるばかりで，結局こんな自分は本当に王なのかと自問する仕末である。

I cannot brook these haughty menaces.
Am I a king, and must be overruled? (I. i. 135—6)

Was ever king thus over-ruled as I? (I. iv. 38)

従来の Marlowe 劇の主人公は常勝将軍 Tamburlaine のように宇宙の何物をも恐れず自らの設定した目標に向って一路邁進し，いわばあふれる情熱を外部に向って発散していたが，この劇では逆にそれが主人公の内部にこめられ，異常な方角にむかってうずいていると考えられないだろうか。Edward は国王としては，Vice たる Avarice に振りまわされた *Respublica* (1553) の Respublica, Sedition に振りまわされた John Bale 作 *Kynge Johan* (1538) のEngland のように，周囲のものにゆさぶられる頼りない人物ではあったが，その反面，彼が国や国王の地位を犠牲にし妃をも捨ててまでして一途に追求していった愛情，それも相手の選択を誤った卑しい男 ("that base and obscure Gaveston" I. i. 101; "That villain Gaveston" I. ii. 11; "that base peasant" I. iv. 7; "Thou proud disturber of thy country's peace, Corrupter of thy king, cause of these broils, Base flatterer" II. v. 9—11) に向けられた歪んだ愛情の激しさ強さは異常なくらい強烈で悪魔的 (demonic) でさえある。

never doted Jove on Ganymede
So much as he on cursed Gaveston. (I. iv. 180—1)

しかも相手側 Gaveston の熱意のほどは実際のところ王と対等のものでなく，王と適当に調子を合わせ，これをよいことにして周囲の反感を意に介せず王を自由に利用している愚かしい狡猾な愛情である。人間的理性では抑えきれない，王の内部を超えたところからほとばしり出るある根源的悪魔的な力に動かされているこの強烈で愚かな愛は，通常の秩序と階位を崩し王自身の破滅を招くことにもなる。しかもこれの当然の報いは予想以上に苛酷なきびしいものになるのを後半で我々は知る。

このように王は国家的利害を無視して私的快楽に執着し不和の因 ("cause of all these jars" II. ii. 222) はあげて王妃の側にありと責任を転嫁する。諸侯は王が Gaveston を寵愛することが根本的に国と国王の破滅をもたらすものであると考え，2幕2場155行以下で国の乱れた実状を直言する。両者の利害関係は全く相容れない。諸侯たちの考えにはエリザベス朝の知識階級が考えたような王らしい王の理想像があり，危機感をもって強く現在の国情を訴え，やがて起る内乱の分裂闘争は国の混乱になるけれども，この限りにおいては彼らのとった態度は正当なものといえよう。諸侯はもともと国王にどこまでも反抗する気持はなく，非難・弾劾の真のほ

こ先は王ではなく取り除きたいと思っているGavestonに向けられている。それ故肝心な王に王権の本質が完全に理解されていないのはまさに悲劇そのものというほかはない。Gaveston 故に新婚早々見捨てられてしまった王妃は王を愛しながらも(II. iv. 15)，こちらの方も婚姻の秘蹟まで自ら破って，次第に自分を親身になって援助してくれる Mortimer の方に傾いて，遂には夫に反抗するにいたるのは哀れな自然の成行きであろう。

So well hast thou deserved, sweet Mortimer,
As Isabel could live with thee forever.
In vain I look for love at Edward's hand,
Whose eyes are fixed on none but Gaveston; (II. iv. 59—62)

彼らの関係は，はじめ王や Gaveston に揶揄されドラマでいう chorus のような役割を演ずる Kent 伯に気づかれる (IV. v. 19—24) 程度しか表出されていないが，後半連合して侵入軍として英国にやってきた時，二人の関係は明確に提示される。王の悪がさらに悪を生んだ形である。

遂に反乱が起り Gaveston が逮捕されすぐ殺害されると，諸侯の最大の憎悪の対象がここで取り除かれたのであるから Mortimer たちの主張が達せられ，道徳劇に必要な一応の因果応報の結末をむかえたわけである。ところがここで終らず，第2の劇としてさらに彼らの Spencer 追放の要求をきっかけに Edward の運命に転機が訪れる。Gaveston の後をついだ寵臣 Spencer に激励されて強い態度を一時とった王は愛する Gaveston の復讐を謀り，力なき王としては ironical に大勝利をえたがうまく行くのはそれまでで，Lancaster 伯など大部分の反逆者を処刑したにもかかわらず，人々に好かれているという理由で (II. ii. 233)，手をだせなかった首謀者 Mortimer をロンドン塔幽閉に止めたため遂に逃げられてしまい，運命が狂ってくる。(Holinshed に従ったとはいえ，当然処刑さるべき肝心の Mortimer を生かしておいたのは，後半の対立者として残しておく必要性があったとしても，劇的構成上一寸弱いきらいがある。) おとなしい忍従の王妃は夫の不幸を思いながらも (IV. v. 73—4)，今度は夫を裏切った不倫の力強い王妃と化し ("that unnatural queen, false Isabel" V. i. 16; "my unconstant queen" V. i. 30)，夫に対する反乱の先頭に立って失政の王がすべての破滅の原因だと見做し，王のだらしのなさを手厳しく咎める。

Misgoverned kings are cause of all this wrack;
And, Edward, thou art one among them all
Whose looseness hath betrayed thy land to spoil
And made the channels overflow with blood. (IV. iv. 9—12)

Edward はウエールズまで追われ，変装してとある修道院にいるところを捕まる。この修道院の瞑想の生活を天国であると考えるようになってきた王は，前半の派手やかな Marlowe 特有の抒情的な彼とはうって変って，きびしい環境のなかで受身

の受難者，汚れなき犠牲者に終始する。

But what is he whom rule and empery
Have not in life or death made miserable?
Come, Spencer; come, Baldock, sit down by me;
Make trial now of that philosophy
That in our famous nurseries of arts
Thou sucked'st from Plato and from Aristotle.
Father, this life contemplative is heaven.
O that I might this life in quiet lead. (IV. vi. 14—21)

But when I call to mind I am a king,
Methinks I should revenge me of the wrongs
That Mortimer and Isabel have done.
But what are kings when regiment is gone,
But perfect shadows in a sunshine day?
My nobles rule, I bear the name of king;
I wear the crown, but am controlled by them. (V. i. 23—9)

これまで一度も聞くことができなかった国王らしい苦しみと嘆きが彼の口からもれてくるが，もはやそれをいやすこともできず，また王位の意味と自分の無力を知るには遅すぎた。王なるが故にこれからはじまる思いもかけぬ恐ろしい残酷な国王苦難の道が彼の前に立ちはだかり，血なまぐさい*Cambises* (1561), *Horestes* (1567), *Gismond of Salerne* (1567/68), *The Spanish Tragedy* (1587) の後をうけて，過去においてこれほどのものが舞台上にかけられたことのなかった様がありありと展開される。と同時に，前半の非難・軽蔑の的であった Edward は一転して今度は専ら同情と憐れみを一身に受ける存在になる。前半の王の生活がわがまま放大で華やかであったため，そして破滅の因といえば愚かな歪んだ愛情だっただけに，すべての拠り所をなさけようしゃなくことごとく奪われてしまった後半の生涯はひときわ苛酷で哀れに思われる。彼の地獄さながらの苦悩は，外面的には彼の肉体を弱らせるための真夜中の歩行や幽閉された地中の下水，内面的にはすべてを剝奪されて果しなく動揺する孤独の瞑想と恐怖の強さに象徴される。王は天と地が一体となって自分を苦しめていると考える (V. i. 96—7)。

最後にねらわれるのは最後に残った王冠と王自身の生命だけである。王が Mortimer に奪われるのを恐れてしばし逡巡しれんれんと執着する最後の王位のシンボルである王冠も，無理じいされた退位承諾と共に議会の名で持ち去られてしまう。この退位によって人間界の正義の道は達せられたといえるのだが，ここで王の悲劇は完全に終らなかった。というのは王の罪は死に価するようなものではなかったのにもかかわらず，権力への野心をいだき続けた Mortimer がさらに王の殺害を

意図したからである。Holinshed では王は最後に自分の非を認めて後悔しているが，この劇では王は最後まで王座の権威を信じ決して自分の非を認めず生涯潔白であったと考えている（"guiltless life" V. i. 73; "These innocent hands of mine" V. i. 98)。従って王は服従の拒否と生の傲慢のはてに死を予期しなければならず，イタリアで訓練を受けた専門的殺し屋 Lightborn[11]によって悲惨な死をむかえなければならない。すべての悪を身につけ表面上は王に親切さを示すこの完全に非人間的な Lightborn に，皮肉にも王が妃への言づてを頼む言葉には現在のみじめな王の悲哀感がよくあらわれている。

Tell Isabel, the queen, I looked not thus,
When for her sake I ran at tilt in France
And there unhorsed the Duke of Cleremont. (V. v. 67—9)

いまや無力の innocent victim と化した王の劇的哀れさは，独裁的実権を握って一層残酷な憎悪すべき Machiavelli 的 villain の様相を後半で呈してきたかっての血気盛んで忠実だった武将 Mortimer と王妃の前半と対照的な性格強化によって一段と強調される。[12]

Feared am I more than loved. (V. iv. 52)
Mortimer's hope surmounts his fortune far. (III. iii. 75)

一方は滅び他方は伸びて行く。しかしかっては "Fortune's wheel" (V. ii. 53) を自分の好きなように動かせると豪語して一人運命に挑戦し，決して後悔しなかった Mortimer も反逆・国王殺害の大罪はのがれられない。たとえ悪い王であっても正義の罰をくだすのは神であり (IV. v. 17—8)，反逆ましてや国王殺害は国家に対する最大の罪悪と当時考えられていた。野望のあまり行きすぎた Mortimer は頂上まで登りつめた権力者の最後を自覚して首をうたれる。de casibus 主題をふまえた stoic な死である。[13]

Base Fortune, now I see that in thy wheel
There is a point, to which when men aspire,
They tumble headlong down. That point I touched,
And, seeing there was no place to mount up higher,
Why should I grieve at my declining fall?
Farewell, fair queen; weep not for Mortimer,
That scorns the world, and, as a traveller,
Goes to discover countries yet unknown. (V. vi. 59—66)

Tamburlaine のような権力を熱望した自己中心的な独断専行は，最後には自滅せざるをえない悪魔的力であることを暗示しているように思われる。この劇の表現したい基本的精神は Baldock の最後にのべる死生観によくあらわれている。

All live to die, and rise to fall. (IV. vi. 111)

かくて "unnatural wars (revolt)" (III. ii. 86; IV. v. 18) は終り，若々しい毅然

たる英国最強の王の一人 Edward III の登場は新しい明るい世界を未来に約束しているようにみえる。

Marlowe の掲げた *Edward II* の "tragic glass" に写ったものをまとめてみよう。当時の歴史劇の典型に従って考えてみると，最も公的に重大で最も政治的である身近かな背景の恐ろしい civil war に situation が設定されているので，定石の政治と道徳を志向したドラマになる筈のところが，[14] ここでは作者はあくまでもその中での個人的人間（allegory をぬけだしてその性格）に精力を集中し，私的 emotion を一番問題にしている。この劇にあらわれた限りでは，Marlowe の考えている人間界の首位に立つ理想的な「王」とは Shakespeare の作品にみられるような "Lord's Anointed" として神権（divine right）をもち神に対する責任を負ったものではなく，イタリア・ルネサンス政治哲学の "human power" に思想的基礎をおいて，支配する相手に対して国王自身の封建的絶対権力を維持しうる能力をもったものと見做している。[15] 正義と法を固く守り，正しく賢明に統治すること，貴族と平民の力をよく認識すること，そして実力あることが国王に要請されている。この思想は Edward に対抗した前半の諸侯の発言の中に顕著に見出せる。ところが肝心の王は暗愚のため私的な盲目的愛に溺れ，公的な王の義務と責任をなおざりにして事の重大性を認識しなかったし，後半になってようやく多少それを意識するようになったとしても時すでに遅く，権力の座をはずされてからのことだった。このように Marlowe の Humanism は彼の初期の楽観的な Machiavelli 的権力（virtù）の観念から次第に離れ，後期では公的徳性ばかりでなくもっと人間的な私的徳性にも権力者たるものの資質を求めるようになってきた。[16]

悲劇的主人公は人間のさけがたい passion の影響下で罪を犯す。そして悲劇が誕生する。外面的には優柔不断で無力にみえる Edward は，すべてを犠牲にし，国を内乱的破滅に導いてまでも一般的に認めがたい自身の根源的内奥からほとばしり出て押えきれず自らを堕落させてしまう破壊的情念に身をゆだね，これを頑固な激しさと強さをもって最後まで執着し続けて行った。この点にこれまでの Marlowe 劇の主人公の外面的情熱との密接なつながりが認められよう。国王たるものは超人的強さで生きぬいて行かねばならない厳しい現世に，彼は国王として生をうけ，そのため自己流に絶対君主たらんと努力した。王たるものの資質に欠けた彼でもうまく行っているうちはまだよかったし，ぼろもあまりださずにすんだ。しかしその運命の向う方向如何にかかわらず，彼はこの世を終る最後まで王として生きて行かねばならず，その結果は不幸にも自ら犯した罪以上の罰として悲惨な死をむかえねばならなかった。作者 Marlowe はいわば人間のあやしき情熱ともいえる Edward II を人間以上のものにぶつけて，その間の緊張した反応をみてみようと試みたように思われる。劇の形態上では，人間界の現実的対立的力関係の中にまきこまれ，Vice 的要素の残像を留めた寵臣 Gaveston や対抗者 Mortimer などの圧力に内外ともに

もみぬかれ，時に（前半）軽蔑され時に（後半）同情されながら，欠点の多い人間の最高位にたつ国王たる人間の力の限界と破滅が Marlowe 特有の冷酷な irony の目を通して語られている。悲劇の源は王の性格にすべて根ざしていたのである。[17]

過去の歴史的なものをはじめて正統的な悲劇の perspective の中にもちこんで，全体としては国王の人間くささのまさった作品になっている。この枠内で作者が認識したことといえばおそらく次のことであろう。どんなに人間のもてる力をふりしぼってあばれあがいてみたところで，結局は世界の内奥にあるものの力，人間を司り操り動かす強大な，たとえば運命や必然あるいは自然・歴史の流れといったようなものの存在には逆らえず，そのたくましい実力をいやおうなしに認めざるをえないのである。そして輝やかしき創造物ともてはやされ，神への反逆者を自認した人間のもてる可能性の限度とそのみじめな敗北を自覚せざるをえなかったのである。*Dr. Faustus* と並ぶこの劇は次に Shakespeare の *Richard II* を，ついで先の Jacobean tragedy をはやくも予告する作品であった。これはまさしくイギリス・ルネサンス時代の pessimistic な人間主義の悲劇といえよう[18]。

（本稿は昭和40年10月の第四回シェイクスピア学会（於東北学院大学）での口頭発表をもとに，加筆訂正をほどこしたものである。）

註

（1） H. B Charlton and R. D. Waller(eds.), *Edward II*, (London, 1933, 2nd ed. 1955) "Introduction", pp. 6—27. なお，Sources としては，Holinshed の外，R. Fabyan, *Chronicles* と John Stow, *Annals of England* を多少利用している。

（2） Irving Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare*, (London, 1957. Revised ed., 1965), p. 125. H. B. Charlton and R. D. Waller, ibid., p. 51.

（3） E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays*, (London, 1944. Peregrine Books, 1962), pp. 106—9.

（4） Tillyard, ibid., p. 63. Lily B. Campbell, *Shakespeare's Histories*, (U. S. A. 1947. London: University Paperbacks, 1964), pp. 170—81.

（5） F. S. Boas, *Christopher Marlowe*, (Oxford, 1940. Reprinted, 1946), pp. 174—5. Charlton and Waller, *op. cit.*, p. 223. *Dido* の冒頭部分での Jupiter と Ganymede, *The Massacre at Paris* における Henry III とその寵臣たち，*Hero and Leander* 2nd Sestyad, 183—91 における Neptune と Leander の関係にあるいは Baines 調書に，この例証がみられよう。また人によっては，この関係を classical ideas of friendship とみるものもある. (H. B. Charlton and R. D. Waller, *op. cit.*, p. 29. Harry Levin, *The Overreacher*, (London, 1954), p. 116. P. H. Kocher, *Christopher Marlowe*, pp. 202—4.)

（6） C. Lamb の有名な評言がある (H. B. Charlton and R. D. Waller, *op. cit.*, pp. 62—3). Charlton and Waller, *op. cit.*, p. 36. F. P. Wilson, *Marlowe and the Early Shakespeare*, (Oxford, 1953), pp. 101—2. V. K. Whitaker, *The Mirror up to Nature*, (California, 1965), p. 51.

(7) Theodore Spencer, *Death and Elizabethan Tragedy*, (Harvard U. P., 1936. New York : Pageant Books, 1960), pp. 223—31.

(8) Harry Levin, *op. cit.*, p. 115. "minion" は9回, "Gaveston" は実に110回使用されている。

(9) ローマ・カトリック教会ではそもそものはじめより homosexual affection を罪としてかたく禁じている。これについては St. Paul の *Epistles* が聖福音書におとらぬ高い権威をもっている。典拠としては,

	Chap.	Verse.
Epistle to Romans	1	25—27
Ist Epistle to Corinthians	6	9—11
Epistle to Galatians	5	19—21
Epistle to Ephesians	5	3
Epistle to Colossians	3	5

なお, St. Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, 2a 2ae Quest. 154 art. 11 and 12 (罪を論じている) が中世のものとしては代表的である。上記の御教示をえた M. Dominic Morrison, O. P. および小此木洋子両氏に心から感謝したい。

(10) P. H. Kocher, *Christopher Marlowe* (North Carolina, 1946. New York, 1962), pp. 202—4.

(11) Lightborn は Marlowe の創造で, 象徴的には Mortimer の分身といえようが, 彼は中世の Chester Plays 第1劇 *The Fall of Lucifer* で3回せりふをしゃべる 'Lightborne' となんらかの関係があると思う。彼を Lucifer の翻案と考えている人がいる。A. L. Rowse, *Christopher Marlowe*, (London, 1964), p. 135. H. Levin, *op. cit.*, p. 124. Charlton and Waller, *op. cit.*, pp. 221—2.

(12) Charlton and Waller, *op. cit.*, pp. 46—7, F. P. Wilson, *op. cit.*, pp. 95—99. Irving Ribner, "Marlowe's *Edward II* and the Tudor History Play", *ELH*, vol. 22 (1955), pp. 243—53 (M. Bluestone and N. Rabkin (eds.), *Shakespeare's Contemporaries*, New Jersy, 1961. pp. 139—47 による。) 一方, D. M. Bevington は王妃の性格は変らないと考えている。(*From Mankind to Marlowe*, Harvard U. P., 1962, pp. 239—40.)

(13) I. Ribner, *ibid.* and *The English History Play*, pp. 126—7.

(14) H. Levin, *op. cit.*, p. 110.

(15) I. Ribner, *op. cit.*, pp. 128—32. P. H. Kocher, *op. cit.*, p. 207. 一方, Tillyard (*op. cit.*, p. 108) や F. P. Wilson (*op. cit.*, p. 125) の見解はこれと対立する。

(16) (15) の註参照。

(17) Michel Poirier, *Christopher Marlowe*, (London, 1950), pp. 176—84.

(18) (15) の註参照。M. A. Mahood, *Poetry and Humanism*, (London, 1950), pp. 81 ff. D. Cole, *Suffering and Evil in the Plays of Christopher Marlowe*, (Princeton U. P., 1962), pp. 161—87 も参照。最近の全体的研究傾向の記述としては, Clifford Leech (ed.), *Marlowe*, (New Jersy, 1964) 中の編者の書いた "Introduction", pp. 1—11 が参考になる。

1966年7月